

## 編集委員長のアクティブ・ラーニング

図書館長 中村 吉 秀

断続的にはあるが、弁論大会最後の総評を昨年度まで務めてきた。本校は、理工系の学校の割には、文化・芸術系の諸行事や企画が多い。学生の人間教育にとって好ましいことである。国語教員かつ日本語学の研究者として、それらにはさまざまなかたちで協力しており、その一環が総評だったわけである。しかし、今年度から図書館長（つまり本誌の編集委員長）を拝命し、本誌の編集作業と時間的にかち合うため、総評を務めることが難しくなった。十数年続けてきたことから、後進に道を譲るにはいい頃合いでもある。

わたしの総評は、およそ総評の名からはかけ離れた内容であった。弁論大会に因み、ことばや論理に関するちょっとした話、笑える話をしていった。せっかく意気をもって畑違いの行事に参加し取り組んでくれた学生を、いい気分を帰したい、と考えたからである。今年度、タイムリミットを迎えて会場を出ようとする、総評の担当が替わることを知らずに、多数の四年生が入口に詰めかけていた。総評を聴くために露店などの準備の手を止めて会場にやって来たのである。試合が終わったの見計らってやってくるのは、本末転倒でどうかとは思う。

しかし、大会にもかくも足を運ぶ動機を提供できたわけで、噂のみ聞いていた「中村の総評を聴くためにだけ弁論大会に来る高学年生」の存在を現認したのは、わたし個人には眼福である。そのような一部学生の期待に応えるためにも、今年度からは同様の趣旨を本誌『青樹』巻頭言に舞台を移して実現できれば、と考えている。

本誌に掲載されている学生の文章は、そのほとんどが国語科の授業課題として提出されたものである。図書館として掲載文章の公募もしているが、国語教員を経由した方が点数にも反映するため、そうする学生が多いので

ある。学生が、自分の文章を活字にする、手近な機会ともなっている。現在の教育界は、それ一色といってもいいくらい、アクティブ・ラーニングについての議論が喧しい。自ら課題を設定し、筋道を考えて結果をなしていくところが真の「力」をつける、という思想に基づくものである。この思想は妥当であるが、こんなことは、少なくとも国語教育においては、アクティブ・ラーニングという術語こそなかったが、何十年も前から当たり前で考察され実践されてきたことであり、殊に作文を書く活動などはアクティブ・ラーニングそのものである。

作文の力にもさまざまな要素があるが、重要な要素の一つに、「読み手を意識して書く」ことがある。これは、意外に難しい。

例えば、われわれ教員は、試験監督時など、教室で手が空いたときに、大概教卓の中にある学級日誌を読むことを密かな愉しみに行っていることが多い。わたしも、かつてあるクラスで、学級日誌を開き、定期試験中の日付の日誌を見たことがある。その日は英語と国語の試験があったようで、日直は「英語はぼろぼろだったが、国語はぼろぼろだった」という意味のことを書いていた。国語教員としては、ほっとしたのだが、その下に担任教員が赤ペンで「英語の方が大事です」と記していた。わたしの心境はご賢察いただけようが、担任教員に悪意があったわけではなからう。学級日誌を書く側が、クラス外の人に読まれる事態がままあることを承知しながら、それを前提にした表現がなかなかできないのである。

作文課題でもそれは同様で、通常の授業においては、読み手意識を育てることが難しい。課題作文を実際に読むのは所詮担当教員だけだからである。しかし、『青樹』があることで、そしてこれに学生の課題作文を掲載することで、不特定多数の読者に読まれることを想定した作文の指導が可能となる。

そして今年度からわたしが引き継いだこの巻頭言も、『青樹』の一つの作品と位置づけ、自分で設定した課題を満たす作品をなす努力をしていきたい。すなわち、弁論大会の総評と同様、学生を主な読み手と想定し、読み手に分かりやすく読みやすい文章、哄笑とまではいかずとも、面白みのある、それでいて校友会誌の巻頭言に相応しい品格はぎりぎり踏み外さない文章とすることを、自らに課すものである。たとえ巻頭言の通念とは多少異なっていたとしても、そういう境地をめざしたい。